

第35号

札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)

定期演奏会に行きましょう

今年は凄い指揮者・ソリスト

札幌は既に06年度の定期演奏会のラインナップを公表しています。会員の皆様はご承知でしょうか。今回は、敢えて06年度のラインナップにこだわりました。音楽監督尾高忠明氏にも伺いました。(2ページ以後をご覧ください) 皆様が定期演奏会にお越しになるよう期待しております。

2006年度演奏会

488^{'06} 4月 21日 fri 19:00 start 22日 sat 15:00 start

ブラームス/ドイツ・レクイエム Op.45

■指揮:尾高忠明(札幌音楽監督)
 ■独唱:澤畑恵美(ソプラノ)、青戸知(バリトン) ■合唱:札幌合唱連盟

493^{'06} 11月 10日 fri 19:00 start 11日 sat 15:00 start

モーツァルト/アンダンテ ハ長調 K.315(フルートとオーケストラのための)
 イベール/フルート協奏曲
 マラー/交響曲第5番 嬰ハ短調

■指揮:尾高忠明(札幌音楽監督) ■独奏:エマニュエル・パユ(フルート)

489^{'06} 5月 21日 sun 15:00 start 22日 mon 19:00 start

モーツァルト/交響曲第36番 ハ長調 K.425「リンツ」
 ショスタコーヴィチ/交響曲第7番 ハ長調 Op.60「レニングラード」

■指揮:ドミトリー・キタエンコ

494^{'06} 12月 8日 fri 19:00 start 9日 sat 15:00 start

スメタナ/連作交響詩「わが祖国」から交響詩「ボヘミアの森と草原から」
 ドヴォルジャーク/交響詩「金の紡ぎ車」 Op.109
 R.コルサコフ/交響組曲「シェエラザード」

■指揮:ラドミル・エリシュカ

490^{'06} 6月 23日 fri 19:00 start 24日 sat 15:00 start

ストラヴィンスキー/バレエ音楽「ミュゼの神を率いるアポロ」
 ラヴェル/ピアノ協奏曲ト長調
 ストラヴィンスキー/バレエ音楽「ペトルーシュカ」

■指揮:高関 健(札幌正指揮者) ■独奏:清水和音(ピアノ)

495^{'07} 1月 26日 fri 19:00 start 27日 sat 15:00 start

モーツァルト/交響曲第25番ト短調 K.183
 モーツァルト/交響曲第35番 K.385「ハフナー」
 モーツァルト/バントマイムのための音楽「パンタロンとコロンビーネ」 K.446

■指揮:井上道義

491^{'06} 9月 22日 fri 19:00 start 23日 sat 15:00 start

ベートーヴェン/劇付随音楽「エグモント」序曲
 ベートーヴェン/交響曲第1番 ハ長調 Op.21
 ベートーヴェン/交響曲第3番 変ホ長調 Op.55「英雄」

■指揮:ユベール・スターン

496^{'07} 2月 23日 fri 19:00 start 24日 sat 15:00 start

ブラームス/交響曲第2番 二長調 Op.73
 ショスタコーヴィチ/チェロ協奏曲第1番 変ホ長調
 バスフニク/神聖な交響曲

■指揮:尾高忠明(札幌音楽監督) ■独奏:石川祐支(札幌首席チェロ奏者)

492^{'06} 10月 20日 fri 19:00 start 21日 sat 15:00 start

モーツァルト/交響曲第32番ト長調 K.318
 R.シュトラウス/ホルン協奏曲第2番 変ホ長調 Op.86
 シューベルト/交響曲第9番 ハ長調 D.944「グレイト」

■指揮:高関 健(札幌正指揮者) ■独奏:ラデク・パボラーク(ホルン)

497^{'07} 3月 23日 fri 19:00 start 24日 sat 15:00 start

ニールセン/アラディン組曲
 グリーグ/ピアノ協奏曲 イ短調 Op.16
 トッピン/交響曲第4番「叙情的」

■指揮:クリスティアン・ヤルヴィ ■独奏:小川典子(ピアノ)

札幌響くらぶは札幌を愛する人達の札幌応援団です

音楽監督に聞く

札幌交響楽団音楽監督

尾高忠明さん

おたかただあき

バランスのとれた
プログラムだと思います!!



©MASAHIDE SATOH

尾高忠明さんのプロフィール

1947年、作曲家・指揮者尾高尚忠の次男として鎌倉に生まれる。桐朋学園大学で斎藤秀雄氏に師事。卒業後N響を指揮してデビュー。ウィーン国立アカデミー留学後東京フィル常任、札幌正、読響常任、BBCウェールズ響首席、紀尾井シンフォニエッタMA・首席の各指揮者を歴任し、98年札幌MA・常任指揮者に就任。04年5月からは札幌で二人目となる音楽監督に就任。

国内の主要オーケストラは勿論、ロンドン・フィル、BBC響、バーミンガム市響、ハレ管、ポーツマス響、ヘルシンキ・フィル、ロッテルダム・フィル、ストラスブル・フィル、バンベルク響、ワルシャワ・フィル、オスロ響、ベルゲン・フィル、メルボルン響、シドニー響、オレゴン響、香港フィル、ロンドン響等に客演。着実に日本人指揮者のリーダー的存在へ歩を進めている。

サントリー音楽賞を受賞の他、ウェールズ音楽演劇大学名誉会員、ウェールズ大学名誉博士号、大英勲章CBE、エルガー・メダルを授与されている。

東京芸大非常勤客員教授も務めている。

今年も残すところあと半月という05年12月15日、ギターでの3日連続の午前午後2回公演という「ファースト・コンサート」の最終日の昼休みに、今年も音楽監督の尾高さんに06年度定期演奏会について伺いました。プログラミングの構想、客演指揮者、ソリスト等について解説していただきました。

06年度のプログラミングの構想は

05年度から定期2回公演になりましたが、集客のこともある程度考えなければならないが、優れた名曲をなるべく集めようという考えでやりました。おかげさまで、4月から6月などは多くのお客様に来ていただきました。その頃に、先のことを考えた時に、ある程度有名なものも入れるけれど、それ以上にそれぞれの指揮者が本当に得意なもの、例えばこの前のオッコ・カムさんのような、ああいうものはぜひ続けていけたらと思いました。で、それぞれの人に何がふさわしいのかを考えていきましたので、全体として出来上がってきた時に、これは足りないなというようなことが出てきました。それで、何度か手直しをして、ベートーヴェンも入ったし、モーツァルト・イヤーでモーツァルトも入ったし、札幌では定評のあるブラームスも、大山さんが何年かおやりになったシンフォニー以外の曲はしばらくやっていますのでレクイエムを入れる、というようなことで、私としては、これでバランスのとれたプログラムになったと思っています。ただ、フランスものが少し少ないかな、07年度にはオール・ラベルというようなことも考えなくてはいけないかな、と思っていますが、バランスは取れたし、指揮者の得意なものも揃ったし、これで、と思っています。

客演指揮者のご紹介を

キタエンコさんについては、今更何も言うことはありませんね。前から私は、札幌はもっと外国人の優れた指揮者と演奏すべきだと思っていました。いろんな情勢からかなわず、日本人中心で、年に1人それもあまりレベルが高いとは言えぬ、というような時期が続きました。キタエンコさんクラスの人達が常時うちの定期に乗るということは、オーケストラのレベルアップに一番大きな影響があると思います。折角来ていただけるので、ロシア物で「レニングラード」という曲は大変な曲ですが、実は私もちょっとやってみたかったのですが、キタエンコさんがやって下さるので、これ以上はありません

ね。組み合わせについてはいろんな案がありましたが、やはりモーツァルト・イヤーということがありまして、06年1月に広上さんがなさいますが、06年度ということで、4月の私がブラームス、6月の高関さんにも入っていないということから、1曲入れたいという「これがいい」というマエストロのご提案で、とてもいいんじゃないだろうかと思いました。今までモーツァルトとショスタコービッチの組み合わせは、ほとんどありませんでしたが、たまたまモーツァルト・イヤーということで、並べてみるといいコンビネーションを考えて下さったなと思います。

スダーンさんは、前回とても皆さんに喜んでいただいて、今は東京交響楽団の関係でよく来て下さっているということで、こちら呼びやすいという面もあります。前回私がベートーヴェン・チクルスをやらさせていただいてから、もう随分月日がたちました。私以外の人のベートーヴェンを札響はぜひ演奏すべきです。スダーンさんは、東京でも言われているように、ほこりにまみれたようなベートーヴェンの曲を、その都度綺麗に洗い流して下さるという評判を聞いていますし、「エグモント」なんかをどのように演奏して下さるのか、すごく楽しみです。

ラドミル・エリシュカさんは、私は実際の演奏会をうかがったことはありませんが、彼が名古屋フィルの練習をしている貴重なビデオを拝見しまして、ご高齢にもかかわらず矍鑠としていらして、「モルダウ」とか「新世界」を練習しておられましたが、おぎなりなところが全くなくて、一つ一つ「ここはこうだよ」というふうにやっておられて、プロフェッサー・タイプという印象でした。でも、練習が進むにしたがって、名古屋フィルの音楽がすばらしくなっていました。そのビデオを見て、この方にはぜひ来ていただこうと思いました。札響にはキタエンコさんのような方も必要だし、ちょっとプロフェッサー的に教えてくれる外国人の方も必要だと思います。特にチェコの方というのは、とても音楽的な国民性ですから、指揮者もすばらしい方を輩出しています。そういう流れを受け継ぐ方です。スメタナやドヴォルジャークをどう演奏して下さるのか楽しみです。ここで迷ったのは「新世界」もしくは「第8番」ということでしたが、意外とうちは「新世界」を多くやっており、8・7・6番あたりも最近やっています、色々な曲を考えた時チェコとロシアは隣の国ですし、札響というのが能力の高いオーケストラであるということをエリシュカさんも分かって

いて下さって「それじゃ、シェエラザードを」ということになりました。伊藤亮太郎君のお披露目ということにもなります。

井上道義さんは私の一番の親友で、悪友でもあります。でも、何と言っても私が尊敬する日本人指揮者のトップクラスです。新日本フィルや京都市響で大変な実績を上げましたが、今はポジションはないが日本中のオーケストラが「井上さんはすごい」と評価しています。特に私がすごいと思うのは彼のモーツァルトですね。私の11月では1曲モーツァルトをやりますが、その足りない分は井上さんでという気持ちです。「パントマイムのための音楽」という曲は、ご存知のように井上さんは指揮者を志す前はクラシック・バレエをやっていたので、いまだにある程度踊れますし、あの指揮ぶりを見ても分かる通り、パントマイムも上手ですし、彼にとってはこれ以上の曲はないですね。確か新日本フィルでやっていて「ぜひこれをやりたい」ということでしたので、全面的に彼にお任せすることにしました。

クリスティアン・ヤルヴィさんだけは私はよく知りません。「エストニアの方で、とても良い」という話しか聞いていなくて、実際に振っているところはまだ拝見していません。すごくのりにのっている人であることは確かで、最後の決断をする時にBBCウェールズの楽員さん達に聞いたら、口うるさい連中なんです。「うん、あれはとても伸びると思うよ」と皆が言っていたので、それじゃ日本に来ているならやってみようということになりました。彼が何が得意なのかは分からず、この曲名を見た時「何じゃこの曲は」と思いましたが、彼の得意中の得意の曲のようです。ニールセンとトゥービンが彼がぜひやりたいということでしたので、よく知られている曲も一つくらい入れてほしいと思い、この年はグリーグの没後100年ということもありまして、今一番人気のある小川典子さんが弾いて下さるということでピアノ協奏曲になりました。

ソリストのご紹介を

4月の澤畑恵美さんと青戸知さんは「ドイツ・レクイエム」にはこれ以上の人はいないと言っていいでしょう。「ドイツ・レクイエム」という曲はバリトンはとても重要で、ソプラノは少ししか歌わないのですがあのナンバーがちゃんと出来ないともう様にならない。要するにフォーレの「レクイエム」と同じなんです。歌う方はものすごい緊張になります。この二人は絶対に信頼の置ける人で、皆と一緒にい

い歌を歌ってくれます。特に「ドイツ・レクイエム」は死者のためというよりも、生きている人が救われなければならないという曲ですから、一人でがなるような人では絶対に困ります。良い意味で、室内乐的に心の底から歌ってくれる人が揃って良かったと思います。

6月の清水和音さんとは、デビューの頃からの長い付き合いで、デビューしてすぐの頃に札幌でやったこともあります。あんなに可愛かったのに、少し太めになりましたが、ピアニストの中で一番オーケストラのことをよく知っている人です。指揮者についての興味もすごくあります。彼は札幌のことが大好きで、いつもやりたいやりたいと言っていましたので、昔ほど清水さんの回数も多くなかったので、1回やろうということになりました。彼はオーケストラの中で弾くのが大好きで、ラベルの協奏曲だけでなく「ペトルーシュカ」も弾いてくれると言っていて、儲かった感じです。他のオケでもやっていて彼のお得意のパターンですので、ぜひ「ペトルーシュカ」もご堪能いただきたいと思います。

10月のラデク・バボラクさんは、これ以上のホルンは今世界中にいないですね。私もやったことがあります。もう、上手いなんてものじゃなくて、音楽そのものであると言って良いでしょう。吹いている時は、どんな音もとても音楽的で、テクニク的にも完璧です。変な音楽メイキングは一切無いという、驚異的な人です。ベルリン・フィルにいますが本当によく来てくれたな、と思います。

11月のエマニュエル・パユさんは、ベルリン・フィルを一度辞めてまた戻りました。フランス人で、日本では一番人気のあるフルーティストですね。出発は、神戸でのフルート・コンクール優勝です。私は、何回か協演したことがあります。フランス人というのは、リズムが転んだり勝手に吹く人が多いのですが、やはりベルリンのトップだけあって、実にしっかりと演奏で、なおかつフランス人の美しさもあります。音も美しいし、アンサンブルに関しても非常に頭が良くて、一緒にやっていて本当に楽しい人です。大変にハンサムで女性のファンが多いですが、全然そういうことに溺れることも無く、驕るところも無いし「いいやつ」です。いいソリストというのは、必ずしも「いいやつ」ではないのですが、この間のスティーブン・イッサーリスとかパユとか本当にいい仲間が札幌に来てくれるというのは大変な喜びですね。

2月の石川祐支君は、うちの首席奏者に就任して

「ロココ変奏曲」というのを演奏しました。それがとても素晴らしかった。オーケストラの皆もすごく喜んで、うちをご存知のようにトランペットの福田君、ヴィオラの廣狩君、コンサート・マスターなどいろんな人がソリストをやっていますが、これは一つ石川君にもやってもらおうじゃないかということで、定期としては初のお披露目になります。今年度は廣狩君、来年度は石川君が定期に登場しますが、うちの楽員にもこれだけすごい人が集まってくるのでお願いしました。

3月は、先ほどお話しした小川典子さんです。小川さんは、かつて私のいところがニューヨークにいた頃に「こんなすごい人がいるんだよ」と言って教えてくれて、名前だけは知っていました。その後BBCのオーケストラで「ノリコって知ってるか」と尋ねられました。「聞いたことあるかな」って言ったら「チャイコフスキーをやったよ」と言われて、「ああ、あの時の」と思い出して、それがすごく「わあ、上手くなったね」と言ったのでした。でも、その頃日本ではまだあまり知られていませんでしたけれど、このところすごい勢いです。彼女のすごいところは、コンチェルトだけでなく室内楽なんかも一生懸命やっているところで、スティーヴン・イッサーリスなんかとよく一緒にやっています。英国で「ノリコ」と言ったら知らない人はいないくらいです。もちろん、内田光子さんという別格もいますけれど、日本のピアニストというのは、正直言って、なかなか英国ではやっていけません。内田さんはもう英国人のようなものですが、別の意味で今はもう「ノリコ」です。彼女とは、私は武満徹の曲をレコーディングしていますが、その時も、びっくりするほど上手くなっていたし、音の立ち上がり「男勝り」なんていうのではなく、音の質が高いですね。絶対に聴き逃してはいけないピアニストの一人だと思います。

ご自身が指揮をなさる回の解説を

4月の「ドイツ・レクイエム」については先ほどもいくつかお話ししましたが、今回は大規模で荘厳な感じよりも、あたたかく家庭的な雰囲気です。ですので、合唱団もP席に座るのではなくて舞台の上と一緒にやってみようと思います。人数も何百人というのではなく、ある程度精鋭の人達で、オーケストラも少し小さめにして質感の高いブラームスを目指したいと思います。私は、この曲は昔から大好きで、学校を出てすぐに取り上げたレク

イエムです。ですから、思い出深い「ドイツ・レクイエム」でオープニングを飾らせていただけるのは大変嬉しいことです。

11月のマーラー「5番」というのは、私は東京フィルでもさんざんやって、いまだに東京フィルのCDが出ていますけれど、BBCのオーケストラで初めてCDとして出たのもマーラーの「5番」です。エポックメイキングな所は何回もマーラー「5番」で勝負してきて、何年か前にここでもやらせてもらいました。あの曲はご存知のようにトランペットのソロで始まりますが、今回うちには福田さんという素晴らしいトランペットがいらっしゃったということで、福田さんをソリストにしての曲ということも考えたのですが、いろんな都合からこの年はちょっと無理ですので、マーラー「5番」を福田君が来たのでぜひやろうということになりました。これは東



京にも持っていきます、福田さんは都響にいらした訳ですから、東京公演では別の意味で「故郷に錦を飾る」ということになってくれるかな、と思っています。

また、パユさんとは彼のお国のもののイペールの「フルート協奏曲」とモーツァルト・イヤーにモーツァルトの「アンダンテ ハ長調 (フルートとオーケストラのための)」をご一緒できるのを楽しみにしています。

07年2月ですが、「神聖な交響曲」の作曲者パヌフニクについては、何年か前の定期で「カティンエピタ」というのをやらせていただきましたが、彼はうちの親父の大親友で、ポーランド人です。ポーランドから英国に帰化して、最後は英国で亡くなりました。指揮者でもあり作曲家でもあった、ということもうちの親父とそっくりなんです。「カティンエピタ」というのは、ポーランド人虐殺に対する怒りの曲という、とてもつらい音楽でしたが、今度の

「神聖な交響曲」というのは彼の出世作といわれる音楽で、実に素晴らしい曲です。この曲で多くの賞を受賞して、そのレコードを家に送ってくれました。兄も私も十幾つかの頃ですが、母との文通が続いていましたので。それをレコードで聴いた時、もう衝撃を受けて「こんないい曲があるのか」と思いました。それ以来私は「これを、絶対に日本初演する」と言っていて、東京フィルの常任になってすぐにこれを初演しました。グレゴリア聖歌も使っているのですが、トランペット4本が大活躍します。普通の位置ではなく、オーケストラの周りの4か所にトランペットが配置されていて、それが呼応するような、第一部の第一章というのはトランペット四人だけの楽です。それが終わって第二章ではスーと弦楽器だけの静かなのがあって、第三章では一緒にやります。第二部は「讃歌」、もちろん神様に対する讃歌ですが、遠くからすぐ近くまで行進が近付いてきます。それが心から出ているグレゴリア聖歌で素晴らしい効果があって、その最後のところに第一章のトランペットの激しい響きが呼応して、もう、何とも言えぬ終わり方です。そんなに長い曲ではありませんが、中身の濃い、これはぜひ皆さんに聴いていただきたい素晴らしい曲です。

ショスタコーヴィッチ「チェロ協奏曲第1番」ですが、これも色々他の曲も考えましたが、石川祐支君はどんな曲がいいのかなと思って、私としては祐支君とさんざん話し合いました。「ショスタコーヴィッチはどうだろう」と言いましたら、彼は「実は一番やりたかった」ということでしたので、それでいこうということになりました。

で、パヌフニクとショスタコーヴィッチが後半になります。後半が二曲ということになりますと、前半をどうしようかと様々に考え、シベリウス没後50年、グリーグが没後何年というのに合わせて、というようなことも考えましたが、そうすると短い曲が続くことになって、核になる曲がほしいという意見もあり、それじゃ私は「ドイツ・レクイエム」で始まって、ブラームスで終わろうと考えました。私はブラームスはとても好きなんですけど、ここ何年かは定期ではブラームスの機会がありませんでした。大山さんやマーガさんがやって下さっていたので、遠慮しているところもあってやっていませんでしたので、PMFではやっていましたが、ぜひ皆さんに私のブラームスを聴いていただこうと思い、「ドイツ・レクイエム」に始まり「2番」で締めることにしました。(佐藤良次)

武満 徹没後10年



親しい友人の岩城宏之氏が、札幌の音楽監督に就任したこと、それで実現した世界で初めて「オール武満プロ」の定期演奏会(1976年12月)が札幌だったことなど幾つか重なって、故武満徹氏は札幌とPMF、そして札幌を愛した作曲家だった。そして、札幌にとって幾つかの幸運が生まれたのだった。

一つは、今では誰も名を知らない、「ろんだん」と言う札幌のローカル月刊誌が主催した二度目の「オール武満プロ」の演奏会(82年6月)だった。「ろんだん」の記者渡辺徹氏が、武満さんの著書を読んで感動し、真っ直ぐ飛んで来て「武満徹作品だけの演奏会を札幌で是非やりたいのです」と、無謀な申し出をした。そして、実現したのが演奏曲目すべてが世界初演のコンサートだった。

二つ目は、黒沢明監督の映画「乱」(85年)の演奏を札幌が担当したことだった。ロンドン交響楽団と天秤に掛けられた時、黒澤監督の「国際的な映画だから」の言葉を振り切って札幌を選んだのは武満さんだった。この演奏は後にレコードになり、海外でも聴かれた。私が88年に米のUSIA(合衆国情報局)の招待で訪米した時、ASCAP(全米音楽著作権管理団体)のモートンゴールド理事長(作曲家)が、「あなたが「乱」の演奏をした札幌の事務局長ですか」と

わざわざ握手を求めて来た。

三つ目は、札幌市が主催者になったPMFだった。3度目の'92年、その年のレジデント・コンポーザーと彼の友達の作曲家と、さらに可能なら武満さんを加えて3人で「現代音楽の作品について」のディスカッションが出来ないだろうかと、急に話が持ち上がった。気軽に来て下さった。そして'94年のレジデント・コンポーザーをお引き受けいただいた。

その後、イサム・ノグチを撮っていた米のドキュメンタリー・フィルムのプロデューサーが武満さんの一言でPMFを撮ることを決め、米・仏共同撮影チームが札幌へ2週間滞在して1時間のドキュメンタリー映画を作った。賞は逃したそうだが、仏での国際ドキュメンタリー・フィルム・コンクールで話題になった。

「ろんだん」の演奏会はすべてFM北海道が収録し、PMF'94年ではHTTBが40分のインタビューを撮りそれぞれの宝になっている。

札幌が武満作品を演奏する時には、札幌だけでなく東京や大阪の会場にも演奏を聴きに来られ、後で、武満作品だけでなく一緒に演奏した「新世界交響曲」やブラームスの交響曲の感想も楽しく聞かせていただいた。

北九州音楽祭でご挨拶したのが最後だった。
(竹津宜男)

from 「札幌くらぶ」

お詫び

前号「札幌くらぶ」第34号5ページに連載中の「札幌物語」に、執筆者名が抜けておりました。執筆者は、いつもの通り竹津宜男さんです。ご迷惑をおかけした竹津さん、及び会員の皆様に深くお詫び申し上げます。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

さ さ き のりこ
佐々木 倫子 さん

ご出身は

帯広市出身です。父が転勤族でしたので、道内の何か所かに移り住み、高校も二回変わって最終的には札幌で高校を卒業しました。

ヴァイオリンを始められたのは

5歳からです。両親が音楽好きで、兄もピアノをやっていたので、何となく自然に始めたといった感じでした。

音楽を専門にと思ったのは

高校2年生の時、進路を決める時期に普通の大学に行くか、音大に行くか迷っていた時に、当時ヴァイオリンを習っていた東京芸大の先生に「受けませんか」と勧められましたので、音大に進学することに決めました。

札幌入団は

大学院在学中に札幌のオーディションを受け、修了後、昨年4月に入団しました。小さい時に札幌の演奏会によく連れて行ってもらって、札幌に親しみがありましたし、行く行くは北海道で音楽活動をしたかったと思っていました。元々、アンサンブルが好きで、大学時代もよく室内楽で活動していましたから憧れの札幌で演奏できて、とても嬉しいです。

入団されての感想は

初めの頃は学生時代とは生活のリズムが全然違いますので、それに慣れるのが大変でした。でも、周りの皆さんがあたたかく支えて下さり、ていねいに指導もしていただきましたので、最近は十分慣れてきました。道内などへの演奏旅行は、行ったことのない土地が多いのですが、マイペースに楽しんでいきます。

久しぶりの北海道での生活は

北国出身の割りに寒さが苦手なので、ちょっとつ



らい面もありますが、豊かな自然に囲まれて生活することで、日々リフレッシュできますし、この環境が演奏する上でのエネルギー源になっている気がします。

趣味は

子どもの頃から習い事としてスキーや水泳をさせてもらっていらしたので、スポーツが大好きです。自分でするのも好きですし、スポーツ全般の観戦が好きで、特にサッカーの観戦が好きです。昨日も日本代表の東アジアカップの試合をテレビ観戦していました。これからワールドカップもありますし、絶対見逃せません。東京にいた頃には、サッカー部の試合に、ユニフォームを着て応援に行ったりしていました。

生活する上で心掛けていることは

心身ともに元気でいられるように、常にリラックスできる時間と空間を大切にしています。

将来の夢は

世界一周の演奏旅行、というのは音楽の為だけでなく、色々な国の文化や歴史を知って、自分自身の可能性を広げたいという思いがあります。また、美術が大好きなので、世界中の美術館巡りもしてみたいです。

ファンに一言

これからも心温まる演奏を目指し、演奏会でのひとときを楽しんでいただければ、と思っています。ぜひ、演奏会にお出でください。

(佐藤良次)

from 「札幌くらぶ」

総会の日程が決まりました

06年度の総会は、4月22日の定期演奏会昼日程修了後、キタラ2F大会議室で開催と決まりました。総会後に懇親会を、というような意見もありますが、それは未定です。今回は、2年に1回の役員改選や会費の額についての事務局提案、全国のプロ・オーケストラ・ファンクラブの連合など、重要な議案がありますので、会員の皆様のご出席を例年以上にお願い致します。

ファンクラブの全国組織は11月11日札幌で

既にお伝え致しておりますように、札幌くらぶが中心になって昨年8月に山形で提案致しました全国のプロオーケストラのファンクラブの会を結成したいという宣言が、現実の行動として動き出そうとしています。「日本プロオーケストラ・ファンクラブ協議会」(仮称)の設立準備会を、今年11月11日の札幌493回定期演奏会に合わせて札幌で開催しましょうと呼びかけたところ、仙台フィル、山形響、群馬響、広島響の各ファンクラブから出席のご返事をいただき、実施することとなりました。

現在のところ、どのような規模・形態で、ということは煮つまっておりませんが、今後、更に検討を重ね、すべての国内プロオーケストラに照会する予定です。最初から大それた組織には思っておりませんが、日本の音楽文化を大きく支えるオーケストラの存在意義を、国民の皆様の共通感覚として持っていただけるように運動していける団体になればと思っています。札幌くらぶがそのリーダーになっていることを、会員の皆様と誇りに思い、「日本の音楽文化は北から」という思いでぜひこの会合を成功させたいと思っています。会員の皆様のお力添えをお願いすることがあるかもしれません。その節はよろしくお願い致します。

この件に関しましては、内容が明らかになる都度、できるかぎり様々な方法で皆様にお伝えしたいと思っております。

尾高さん ようこそ札幌へ歓迎会開催

3月5日(日)、以前から企画していました、尾高さんが札幌に「移住」される「おめでた」を祝う会が実現しました。今回はスタッフとの会で、会員の皆様にはご案内できませんでしたが、そのうちに、会員と家族も含めての大々的ウェルカムパーティーもやりましょう。多分、尾高さんも参加して下さると思います。

当日は、宮様スキーの行事のため、会長は前半の尾高さんを交えた札幌事務局との話し合いにしか出席できませんでしたが、今後の「札幌くらぶコンサート」をどうするかなど、真剣な話し合いがなされました。

後半の歓迎会では、例によって「尾高節」がさく裂。残念ながらご出席予定の奥様が風邪のため欠席されましたが、「さっき、タクシーを待っていたら、着物を着た綺麗なお姉さんが寄ってきて、テレビで見ましたよ」と言われて恐縮したとか、東急ストアが多いのに驚いたとか、丸井さんをはじめ、デパ地下に初めて行って楽しかったとか、愛車レガシーで楽しく北海道を走っていますよ、というようなことを嬉しそうに話され、一同、「これは、北海道に引き込むしかないな」と思いました。

編集後記

今号は、06年度定期演奏会プログラム特集号というようなことになりました。そのことは前号で申しあげていたのですが、ここまでの特集になるとは思っていませんでした。しかし、尾高さんのお話は、カットするにはあまりに惜しく、他のページとの兼ね合いで悩んでいたところ、事務局長の「何で悩む。尾高さんは札幌の宝だぞ。できるだけ載せろ」というお言葉で、

初めて4ページのインタビュー、関連しての定期プロの紹介となりました。これも、札幌のファンの機関誌なんだからいいかな、と思っています。ならば、来年度は、今回のような遠慮した形ではなく、年間全10回の公演について、指揮者・ソリストにとどまらず、曲目の解説に至るまですべてを我らが「チューさん」に語っていただこうと思っています。(佐藤良次)